

No. 8

博物館報

(写真説明)

彼は天保4年(1843)佐賀藩士の家に生れ、旧藩主鍋島直大に従って欧州に渡り、外交官として公務に従事しながら画業に精進し、帰朝後は、農商務省商工局次長をつとめ、明治17年41才の若さで没した特異な画人である。

彼の製作の期間は約8年位と推定されるが、公務のかたわら彼が如何に西洋の絵画に傾倒し、また西洋の技法を端的に把握せんと努力したかは、彼の数少ない油彩、デッサンから窺い知ることができる。

しかも彼の場合、日本画壇とは没交渉で彼の師、レオン・ボンナやマツカリの指導のもとにルネサンスの古典的な技法や、それを越えて彼の感覚に映じた様々な技法を遠慮なく摂取して独自の画風をつくったことは、わか国洋画界の先覚者の中で特異な存在といえよう。

この絵は、黒に近い暗色をバックに、可愛いらしい少女が、左手にマンドリンを傾めに抱えこんで、直線の構成に変化を与えている。

全体的に、ルネサンスの古典的な描法を追求し、服装はエプロンドレスを着込み、濃紺の地色はバックとの調和を果し、ベルトの部分とドレス下方の織り模様は重厚な重苦しさの中に、唯一の華麗な装飾となり主題とよく調和している。百武の力作の一つといえよう。



マンドリンを持つ少女 百武兼行(1843~1884)



マンドリンを持つ少女.....	1
祭祀遺物.....	2
今山合戦の資料.....	3
1971年のカササギ分布調査報告.....	4・5
第5回研究講座 佐賀県の石造文化.....	6
県内博物館紹介 有田陶磁美術館.....	7
博物館日誌、行事案内.....	8

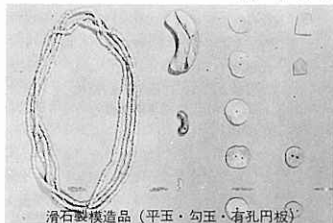
資料紹介

祭祀遺物

神霊を奉祀するために使用されたものが、祭祀遺物であるが、神社の原初形態がほぼ統一され、祭祀も全国的に類型化した古墳時代の祭祀遺跡から発見される遺物を、狭義の祭祀遺物と呼んでいる。祭祀遺物には、土器（土師器・須恵器）・土製模造品・滑石製模造品・金属製品等がある。

県内出土の祭祀遺物としては、鳥栖市柚比出土の手持勾玉、武雄市片白出土の滑石製模造鏡などが代表的なものであって、他に土製模造品が数例発見されているにすぎない。祭祀遺物が一括して発見されたのは、昭和44年に発掘調査された基山町伊勢山遺跡のみであって、遺物は県立博物館に一括保存されている。

この伊勢山遺跡から出土している祭祀遺物は、手捏

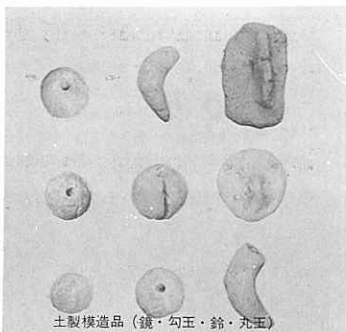


滑石製模造品 (平玉・勾玉・有孔円板)

土器や土製品などの土製模造品、滑石製模造品、土師器や須恵器などの土器、以上の3種類であるが、この祭祀遺跡が住居跡と重複して営まれていた関係で、土師器や須恵器などについては祭祀遺物と生活遺物との識別が困難であった。

土製模造品には、手捏埴と手捏器台、勾玉、丸玉、鏡、鈴などがあるが、手捏の埴と器台がその主流をなしている。滑石製模造品としては、有孔円板・勾玉・平玉があるが、平玉が圧倒的多数を占めており、有孔円板に類するもので無孔の長方形が2個出ている。滑石製模造品の種類は、少なかったが、滑石の破片が数点出土している点からみて、この遺跡で加工されたものではないかと考えられる。

伊勢山祭祀遺跡は、同じ古墳時代の住居跡と重複して営まれていて、住居跡の床面に約10センチメートル余り盛り土をして清浄となし、祭祀場として転用されたことが推定される。祭祀遺跡は、2ヵ所から発見されたが、1は滑石製模造品と手捏土器とを主体とする



土製模造品 (鏡・勾玉・鈴・丸玉)

のに対し、他は高杯などの祭祀用土器を中心とするものであって、遺物の上からこの2ヵ所の遺跡に性格の相違が見られることは、興味のある問題である。

この伊勢山祭祀遺跡は、住居跡と重複はしているが住居跡の床面に厚さ10センチメートル前後に新しく土を敷きつめて祭場が設けられていることが顕著である点からみて、住居集落に付属した祭祀遺跡であったとは考えられない。現在この段丘上には、巨石や巨木または池泉などもない点から、自然物を対象とした祭祀遺跡であったのかも現在確認することができない。この遺跡に立つて見渡すと、肥筑の山々が遠くに、または眼前に連続して展開している。この中で、標高414メートルの基山が一番近くに眺みされる。この祭



土製模造品 (手捏器台)

祀遺跡は、この基山を対象とした祭祀遺跡ではなかったろうかとも考えられるのであるが、この遺跡から眺みされる基山の山容は、神南備式霊山と呼ぶにはやや形がくずれていて、確定することは不可能である。

この伊勢山遺跡は、出土した土器類によって、5世紀後半に編年されるものであるが、県内では他に類を見ない豊富な祭祀遺物として、その資料的価値は高く評価されるものであろう。



土製模造品 (手捏埴・杯)

(学芸課)

資料紹介②

今山合戦の資料



佐賀郡大和町に所在する今山古戦場跡は天山山系高取山（468cm）の南麓、標高40～60の小高い丘陵一帯でここからは佐賀平野が一望され、晴れの日には久留米高良山まで望まれる。今を去る402年前この地一帯は竜造寺氏にとつての興亡の合戦の地であった。九州一円への征覇にあつた大友宗麟は肥前の竜造寺隆信を攻めるため永禄12年（1569）正月府内の居城を立ち佐嘉へ向かって攻め入った。しかし、翌元亀元年隆信と一時和睦したものの久留米高良山にひかえた宗麟は弟（一説では甥）の大友八郎親秀を大将に再び佐嘉城に向かわせた。時に元亀元年8月17日で大友勢3万余騎が今山の北の嶺に陣し20日を城攻めの日と決したといわれる。「九州治乱記」には、「東は神埼、茶臼隈・火隈山より西は川上、真手、小城の今山まで其行程5～6里が間、山野、谷嶺森林に至るまで皆家々の旗立てて敵陣ならずといふ事なし」と誌されており、これを偵察した鍋島信昌（佐賀藩祖鍋島直茂）は味方の小勢は「九牛の一毛なれど……十死一生の勝負を決して」夜討ちを決行すべく進言したという。かくして、信昌は8百余の軍を率いて酒宴たけなわの大友軍に夜襲をかけ奇跡的に勝利を得たといわれる。竜造寺隆信はのちに五州二島の大守と仰がれるに至ったが、その基礎は実にこの合戦の勝利によって築かれたといふべきであろう。

大友八郎親秀討取りの二間半の槍

径3cmの木柄で全長431cm穂先は16.3cm（平肉幅1.7cm、中心2.2cm、目釘穴2ヶ）の直槍で平肉に独鈷剣の彫刻があり中心には「相州住周廣」の銘があ

る。柄の先端部は銅板の先覆と4ヶの輪がついている。この槍は竜造寺隆信の家臣成松遠江守信勝が、元亀元年（1570）8月19日の今山の夜襲で敵将大友親秀を討取った槍と伝承されているもので、信勝の直系といわれる成松正夫氏（鎌倉市在住）から寄託を受けたものである。なお槍の中心銘の周廣は永禄年間（1558～1570）或いは明応・永正年間（1492～1521）頃の刀工である。

成松信勝に与えた隆信の感状

竜造寺隆信は成松信勝が大友八郎を討取った功績をたたえ、特に異例の感状を与えた。それには「去廿日於今山豊州陣切崩刻抽粉骨人身体大友八郎方被討捕之段高名無比類候、弓矢静謐之初可加扶助候 別而辛勞之趣向後不可忘却之状如件 元亀元年八月廿六日 隆信（花押）成松刑部少輔殿へ」とある。成松信勝は「業隠巻六」では「隆信公の四天王」の一人といわれた豪者のようで、初名を新十郎・刑部少輔と称し数々の武勲があつて、天正12年（1584）有馬氏との島原の陣で隆信と共に戦死している。



大友軍武將の「熊の毛の兜」

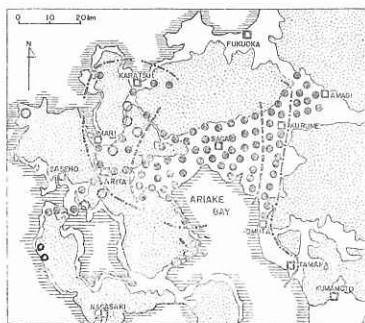
高さ26cm縁径33.5cmの木製で三角錐の形をし外側は動物の毛で全面を膠付けにしてあり、正面には木製のV字の銀形と金泊木製の煙葉に似た紋がついている。これは大友軍の武將がつけていた「熊の毛の兜」といわれるもので、今山合戦でえたものと伝えられている。なお、鍋島家の煙葉の紋は夜襲の際、八郎方の帷幕に映っていたこの紋からとらえたものといわれている。この兜は鍋島報効会で所蔵されてきたものである。



大友八郎親秀討取りの二間半の槍の先端部

（学芸課 尾形善郎）

1971年のカササギ分布調査報告



カササギの1971年の分布範囲

- : '70年までに知られた生息地
- : '71年度調査で発見された新生息地
- 線内は1931年の分布範囲(弥富 31より)
- · - ·線内は1948年の分布範囲(谷口'56より)

日本では北九州の佐賀、長崎、福岡の三県だけにしか生息しないといわれている、カササギの分布範囲および生息密度を3県の有志により合同調査が実施された。調査要領は次のとおり。

調査期間 1971年3月上旬～4月中旬

調査対象 カササギの姿ではなく、巣を確認すること。

記録方法 地図(1/1万～1/2.5万)に巣の位置を記入

巣の記号 ● 使用中の巣
× 使用していない巣、または古巣

調査した範囲、地図に赤線を入れる。

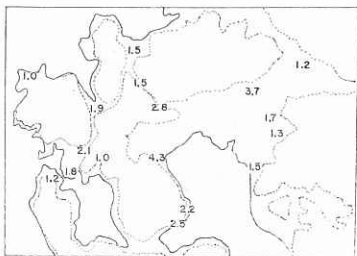
調査人員氏名、日時、天候および調査に要した時間
調査地域の分担 (()は兼担者)

1. 長崎県早岐、柿ノ浦—大野広、柿田(久保)
2. 鹿島、多良—松尾武、松尾安、(柿田)
3. 伊万里—音成、(久保)
4. 唐津、呼子、小城—田中、福田、多久島
5. 佐賀北部—大野徳。
6. 福岡県朝倉平野(二日市)—平島、木下英。
7. 福岡県朝倉平野(甘木)—桑野。
8. 福岡県八女、筑後—松藤、小林、木下博。
9. 大牟田、玉名方面—土谷、(久保)

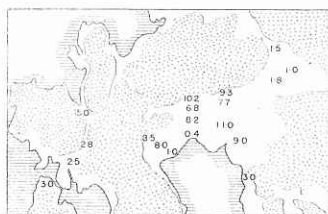
上記の分担による結果について、佐賀大学教養部、久保浩洋助教授によってまとめられた。

まとめられた結論は別表のように、

- 1、分布域が従来の調査に比べ、西へ広がっている。
- 2、調査できた地域では、分布密度が低くなっているとなっている。その原因については、県の東部地域は、カササギの生息環境である緑地、原野、農地や樹木が、工場用地、住宅用地のために、狭められた。佐賀市中心の平野部では、「米つくり」のため農桑使用

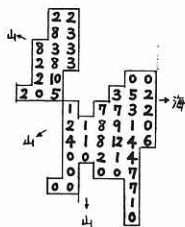


カササギの各地における生息密度(1971年度)



1966～70頃の生息密度(久保'71より)

○ 巣調査状況(1×1km目盛)



鹿島-塩田(1971)

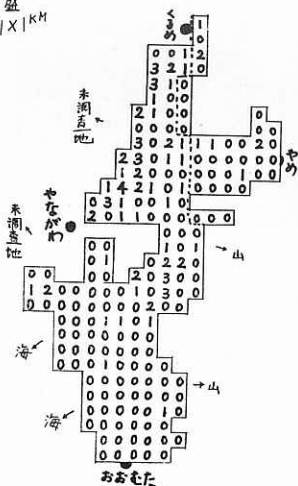


多 久 (1971)



小城郡(小城生物部, 1970調査より)

1日盛
1X1KM



久留米~大牟田 (1971)

の副次的原因で減少した。カササギ同志の近親繁殖のため、生存能力が低下したなどが考えられる。しかし決定的な原因はつかめない。

カササギ調査を全国的に依頼して実施したためか、次のような新しいことが知られた。

- 1、「野鳥」1971年11月号(日本野鳥の会機関誌)。京都御所で、1970年11月13日正后頃、藤羅謙二氏が1羽を確認。(飼育鳥か逃げたもののように思われる。)
- 2、熊本県八代に明治時代に住んでいたとの情報を得て、熊本県立図書館で調査してもらったところ昭和2年刊、熊本県教育会八代郡支部編、八代郡誌、16頁、鳥類の項に

カササギ(明治30年頃までは棲息せしも今は全く見へず)

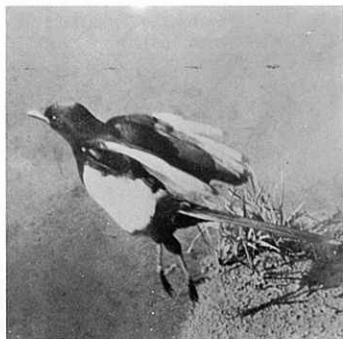
とあって、生存を裏づけることができる。

- 3、1971年1月24日の調査委員会で、宮崎のカササギのことが話題にとりあげられ、約1ヶ年の連絡、調査結果で、宮崎大学、中島義人先生から宮崎県児湯郡川南町大字川南2198宮崎県総合農業試験場畜産部肉畜支場において、1965、4月から1969、10月まで1羽のメスが、2回構築、1回産卵(無精卵)を確認した。

中島先生の見解では自然渡来のものではないかといわれている。

なお1972年は、佐賀平野を中心にした生息密度を調べるようにしている。

カササギ分布調査とともに、オナガの調査も併行して実施してもらったが、確認したものは1羽もなかった。



飛び立つカササギ

(学芸課 手塚静雄)

第5回 研究講座

佐賀県の石造文化

——特に刻像について——

刻像を分類してみると、線彫像・浮彫像・半肉彫像・丸彫像・板彫像・肉彫像の6種類とすることができようである。これらの刻像の中で最初に現われるのが、線彫像であって、その遺例としては北方町勇猛寺にある平安時代の仁安3年(1168)の造立銘を有するクリカラ不動が県内では最古のものである。ところが、この像に続く鎌倉時代の線彫像は現在まで発見されていないが、これは鎌倉時代においては五輪塔・層塔をはじめとする石造塔婆の建立が盛んであったことも刻像の遺例が少ないことの一つの原因をなしているのではないかと考えられる。

この仁安3年につづく線彫像は、室町時代の応永29年(1422)の塩田町下野辺田の地蔵立像である。この像より僅か2年後の応永31年(1424)に造立されている北茂安町中津隈の地蔵立像は、すでに浮彫像となっていることが注目される。しかし、この像は浮彫とは異っても下半身にはなお線彫の手法を濃厚にとどめている点、線彫から浮彫への過渡的様式の刻像であるともみらるべきであろう。浮彫像の初現は、鎌倉時代にさかのぼるものと考えられ、造立銘はないが、鎌倉時代後期のもつと推定される太良町竹崎観音の石造三重塔の基礎には、孔雀文様や三葉蓮華文様などの浮彫がすでに現われている。

この浮彫像は、室町時代にその全盛期を迎えていて、天正11年(1583)の山内町宮野の板碑に刻まれている五輪塔をはじめ、室町時代に造立されたと推定される板碑にみられる刻像の大部分は浮彫となっている。

浮彫像がさらに写実的な半肉彫像へと発展するのは、室町時代であって、その初現的なものが三田川町箱川妙雲寺の明応10年(1501)六地藏である。これについて、白石町川津の文亀2年(1502)、三田川町箱川妙雲寺の文亀3年(1503)等の六地藏が造立されている。県内に現存している数百基にのぼる六地藏の大半は、室町時代に造立されたものであり、そのほとんどすべてが半肉彫像であって、室町時代の刻像は浮彫と半肉彫によって代表されるとみても過言ではない。

半肉彫像について出現するのが、肉彫像である。この肉彫像は、その彫法からみて、丸彫像・板彫像・肉彫像の3種に細分される。丸彫像は、半球形の素材を、板彫像は方柱形の素材を用いたもので、像はその素材に左右されるため手や足の表現が極めて不自然なものとなっている。この丸彫像や板彫像は、室町時代後期にはば時を同じくして出現しているが、在銘の遺品は

ともに少ない。

丸彫像は、三日月町堀江大徳寺の文亀2年(1502)の阿弥陀如来坐像を初現とし、板彫像の遺例としては、山内町宮野の天正10年(1582)のエンマ立像、佐賀市久保泉町の天正13年(1585)の十一面観音立像などがあふ。

依養の肉彫像の初現は、江戸時代の初頭ごろと推定されるのであるが、まだ適格な遺例に接することができない。肉彫像は江戸時代に開花するのであるが、その最盛期は、元禄(1688～)・宝永(1704～)・正徳(～1715)年間であって、この期の石造刻像は木彫のものぐもがある。しかし、この肉彫像も文化(1804～)期以降は、その衰退期を迎えるに至っている。

県内の刻像の中で、特に注目されるものに、牛津町紙川永福寺の線彫六地藏、多久市桐野山妙覚寺の伝弘法大師作四天王立像、相知町の鶴殿石仏群などがある。鶴殿石仏群の中尊である十一面観音の下半身が浮彫に近い簡略化された表現、または、両足の表現が體を中にして爪先を左右に大きく開く彫法などにこの彫像の時期が暗示されていると考えられる。



天正13年の十一面観音板彫像
(佐賀市久保泉町久保)

(副館長 木下之治)

県内博物館案内

その1

有田陶磁美術館

○館長 松尾 茂(有田町教育委員会、教育長兼務)

○所在地 佐賀県西松浦郡有田町3区1356番地

TEL有田局2-3372

○交通の便

佐世保線上有田駅より徒歩10分、有田駅より西肥バス、「札の辻」下車、徒歩1～2分。

○休館日 毎週月曜日、祝祭日、年末29日～1月3日、展示替の場合3日～5日

○入館料 大人 20円

学生、小人 10円

団体 (30名以上) 適宜割引

○設置理由と目的

佐賀県内の陶芸文化の発展に寄与し、陶磁器工業の振興をはかるため、各時代の古陶磁器ならびに現代の文作および本県窯業の発達資料、意匠、図案資料や古文書、技術資料等を企画的に公開展示して、これを広



玄関入口

く紹介普及宣伝につとめ併せて陶磁工芸に関する資料の調査研究を行なう。

○運営上の特色

博物館法による登録博物館で、有田町教育委員会の所管に属し、陶磁器の専門館である。

組織は、館長1名(兼務)、副館長1名学芸員1名(兼務)、業務係1名(予定)で、常勤は山澤副館長1名だけで、出品物の借用、返還など特別の場合は公民館より増援される。年間事

業予算は人件費を除いて74万5千円である。

○施設の規模、構造の特色

古くから残っていた石造2階建の純日本式石蔵で、江戸時代鍋島藩政による内外の交易品を取めた陶蔵として当時重要な役割を果たした有田陶芸文化発展の建物で、文政11年(1828)有田大火の折、焼失をまぬかれた貴重な建造物である。

建物の面積は、幅5m40cm、長さ12m60cmの2階建て別に事務室、玄関、カウンターがある。なお玄関横の石壁には、さる昭和31年10月11日、郷土出身の詩人蒲原有明の詩文「有田皿山にて」がゴスの匂い豊かに書かれた縦85cm横1mの白磁の陶板がはめこまれており、有田陶芸の力と味をもっとも素朴に表明したもので、わか国文学碑上まにみる詩碑として注目されている。

○資料収集の目標

常時展示には購入品、常時出品者の委託品を展示するが、肥前一円よりの発掘陶片、古唐津、朝鮮陶磁器古文書、有田皿山会所より発行の名代札、その他資料価値の高いもの。

企画展示は、年2回春秋に行い、各所蔵家より借用展示する。

○主な資料の紹介

○天狗谷古窯跡出土の徳利、碗、皿類(初期伊万里系)

○「久次良」銘の染付茶碗(初期伊万里系・寛永19年釋古場窯)

○染付葡萄絵大皿(初期伊万里系・黒牟田山辺窯)

○染付松竹梅文平皿(初期伊万里系)

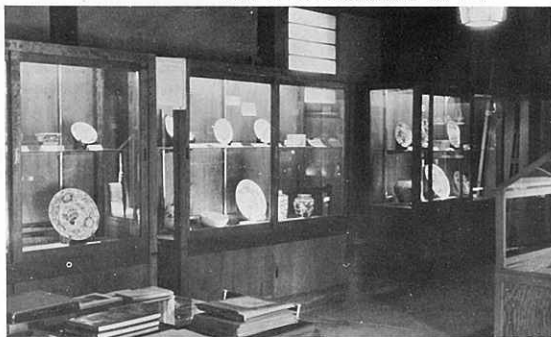
○彩絵組大像(古伊万里系・県重要文化財・江戸初期)

○染錦元禄美人絵筒型瓶(古伊万里系・江戸中期)

○染付職人づくし大皿(古伊万里系・江戸末期)

○にごし手彩絵唐人図磁器枕(初期柿右衛門)

○染付つくし文皿(鍋島藩窯系・江戸中期)



一階展示室

(学芸課 久保儀市)

博物館日誌

- 3月24日 河村龍夫氏来館（資料寄託）
 3月25日 第5回博物館研究講座
 「佐賀県の石造文化について」
 講師 本館副館長 木下之治氏
 4月6日 佐賀県新規採用職員68人本館見学

- 4月10日 福岡通産局長 北山昌寛氏来館
 4月12日 池田知事、資本市振興財団理事長・佐賀県東京県人会々長 山田義見氏を案内して来館
 4月20日 第2回木器、鉄器保存加工研修会
 4月27日 講師 奈良国立文化財研究所、平城宮跡発掘調査部 沢田正昭氏

行事お知らせ

◎九州博物館協議会総会の開催について

昭和47年度（第12回）九州博物館協議会総会は下記により佐賀県立博物館で開催されます。

今回の総会には5月15日復帰を目前にひかえている沖縄の琉球政府立博物館からも参加が予定されています。

日程

- 5月10日(休) 役員会
 5月11日(休) 総会

●議題及び協議事項

- (1)昭和46年度会務報告
- (2)昭和46年度歳入、歳出の決算について
- (3)役員会の改選について
- (4)昭和47年度歳入、歳出予算（案）について
- (5)各館からの提出議題について
- (6)昭和48年度九州博物館協議会の開催地の決定について
- (7)その他

●講演会

演題 「九州における仏教美術について」
 講師 九州大学助教授 平田 寛氏

●佐賀県の紹介

佐賀県立博物館 副館長 木下之治氏
 5月12日（金） 現地研修

視察箇所

- 有田陶磁美術館
 （肥前赤絵名品展開催中）
 有田町榊右衛門齋元
 鹿島市祐徳稲荷神社
 鹿島市祐徳博物館

◎第39回独立美術協会展

- 趣旨 現代日本洋画界における在野の美術団体として、これまでの洋画壇のアカデミックな傾向に対し、新時代の美術の方向づけをするという美術思潮をもって独立美術協会が油絵の美術集団として毎年独立美術協会の巡回展を本県で開催し、美術文化の向上に寄与すると共に、本県の洋画の振興に資するものとする。

- 主催 佐賀県教育委員会・県立博物館

- 後援 県文化会議・佐賀美術協会・県造形教育研究会
- 会期 昭和47年5月18日から28日まで（11日間）
- 会場 佐賀県立博物館
- 出品内容 油絵 100点
 ・文化勲章・芸術院賞・独立会員 林 武
 ・独立会員・毎日芸術賞・国際形象展同人 野口弥太郎
 ・ " 芸術選奨・現代展賞 島海 青児
 ・ " 毎日美術賞・国際美術賞 高島達四郎
 県出身在京独立会員 森 通・古賀 猛・高崎 文夫・江口良
 県内在住独立会員 吉田西橋の作品をはじめとし、会員会友の作品

- 観覧料……大人150円・大生100円・中小生50円

◎野鳥展

会場、中展示室

会期、6月4日から25日まで（月曜休館）

自然保護と野鳥の生態を紹介するために開催するもので、出品物は当館所蔵の剥製標本 120点のほか、県内所有者の剥製標本20点。その他野鳥の生態写真、野鳥保護解説パネルやポスターなど。また県が指定した保護区、休猟区の分布を明示して、本県の野鳥保護の姿がわかるように展示する。

◎博物館教室案内

当館では、博物館に親しみをもたせ、学習意欲向上の一助とするため博物館資料を中心とした博物館教室を下記により開催します。

- ①対象 県内の中高校生徒
- ②場所 当館中展示室
- ③時間 毎回日曜日 13時から15時まで
 5月21日（日）考古学はどういう学問か。
 5月28日（日）土石器時代について
 （以下開催期日は次号にてお知らせします）

博物館報	第 8 号
発行年月日	昭和 47 年 5 月 1 日
編 集	古 賀 秀 男
発 行	佐賀市城内一丁目15-23 佐賀県立博物館
印 刷	佐賀印刷社